

『分かれ道』

渋谷 悟獅

「ハア、ハア」「あともう少し!」

大汗をかき、荒い息を吐きながら男は必死に自転車をこいで山道を駆け上がった。足が痺れる。心臓は今にも破れそう。しかし、絶対にここでくじけるわけにはいかない。ブルゴーニュに辿り着かねば、すべてが終わる。「俺は一度死んで、生き返った身だ。与えられた命を絶対に無駄にはしない!」

急な坂を越えて森を抜けた時だった。突然「H a i t (止まれ) !」と大きな声で誰かに呼び止められ、ルネは驚いて急ブレーキをかけた。すると目の前にグレーの制服を着た兵士が現れた。帽子には大きな驚と鉤十字の模様が付いている。ドイツ国防軍だ。

「おい、お前、ここで何をしている?」

兵士は強い口調でルネに質問した。ルネは焦った。恐怖で手と足が震えるのを必死で隠した。

「お前はレジスタンスか?」

と兵士は続けた。とっさにルネは得意のドイツ語で答えた。

「いいえ、私はレジスタンスなんかではありません。ご覧の通りドイツ人ですよ。ただ朝の散歩をしていただけです。」

すると兵士は

「ドイツ人か。なら問題ない。行け!」

と言い、通行を許可した。ルネは息もつかずに自転車に飛び乗り、全速力で逃げた。兵士の姿が消えた瞬間、力が抜けて倒れそうになった。

「俺は…。ドイツ人じゃない。ユダヤ人なんだ。」

心の中でそう呟き、深呼吸をすると、ルネは再びハンドルを握りしめ、前を見つめた。命懸けの逃避行は、まだ始まったばかりだった。

その後もルネは、数えきれないほどの山や谷を越え、急な坂道を上り降りした。何百キロ走ったのか自分でもわからない。体はとっくに限界を超えていた。それでも彼は、歯を食いしばってペダルをこぎ続けた。

そして数週間後。ルネの目の前に広がったのは、青く輝く海の街だ。現在はヴィシーフランスと呼ばれる地区の一つで、追い詰められたフランス人やユダヤ人達が集まっていた。ルネはこの町でアパートを借りた。お金に困っていなかった。なぜなら若い頃に必死に働き、相当な貯金があったからだ。部屋に入ると、そこにはベッドがあ

った。二か月もの間、冷たい土や石の上で眠るしかなかった彼にとつて、それは夢のような光景だった。柔らかな布団に倒れ込んだ瞬間、ルネは深い眠りへと落ちていった。彼はそこで二、三年を過ごした。そんなある日、急に嫌な知らせが入った。なんと北フランスを占領していたドイツ人が、ヴィジーフランスにまで進軍してきたというのだ。

「どうしよう…また逃げなければ。」

ルネはあわてて荷物をまとめ、町の教会へ走った。息を切らしてドアを開けると、中にいた神父が驚いていてこちらを振り向いた。

「こんな時間にどうしたんだ？とにかく中に入りなさい。まずは落ち着いて。」

「ありがとうございます」

ルネは必死に体の震えを抑えながら、涙まじりの声で言った。

「神父様、お願いします。どうか、私を助けてください。」

神父は驚いた顔をしながらも、静かに答えた。

「助ける？一体どうしたんだ。まずは君の話聞かせてもらえん。」

「わかりました。では、私が生まれた時のことから話しましょう。」

「私の両親はアルザス系ユダヤ人で、姉が一人いました。1906年、両親が仕事でベルギーに来ていたときに、私は生まれました。」

産声をあげず、誰もが死んだと思ったけれど、次の瞬間息を吹き返したそうです。だから私は「再び」を意味する「ルネ」と名付けられました。しかし、母は二年後に出産で亡くなり、父も三年後に病で亡くなりました。五歳のときにはもう両親はいませんでした。私は姉と引き離され、親戚に引き取られました。しかし叔母夫妻は私を邪魔者扱いしました。ベルリンの学校でもユダヤ人だという理由で差別を受けました。でも、勉強だけは負けず、成績はいつも一位でした。支えになつたのは、姉との思い出と、勉強だけでした。」

神父は黙って聞いていた。ルネは続ける。

「高校になって大学進学を希望しましたが、叔母に拒否されました。生活費も自分で出せと言われたので、進学はあきらめ、デパートで働きました。数年後、ヒトラーが政権を取ったとき、私はすぐに危険を感じました。そこでデパートの社長に頼み込み、フランス支店に移してもらうことに成功しました。パリに逃げるのができたんです。」

ルネの目に涙がにじむ。

「私はヒトラーがユダヤ人に危害を加えるだろうと予想をしていました。ですから、親戚や従妹にすぐに国外へ逃げるよう手紙を書きました。「今すぐ国外へ逃げて。そうしないと殺されてしまう」と訴えたのです。けれども誰も信じてくれなかった。やがて彼らはナチスに殺されました。今も胸を締めつけるのは、行方がわからなくなった姉のことです。」

彼は唇を噛んで、苦しげに続けた。

「その後、私は急いでフランス国籍を取り、戦争が始まるとフランス軍に加わりました。私がユダヤ人であるを知った上官は、死んだ兵士のパスポートを渡し、「これからはアンドレ・ビリエと名乗れ」と言ったのです。」神父は静かに問いかけた。

「ルネ、君の本名は？」

「はい。私の名前は、ルネ・カツツです。」

「そうか。誰が聞いてもユダヤ人の名だな。…続けてくれ。」

ルネは下を向いたまま、再び話始めた。

「やがてドイツ軍が進軍し、私たちの部隊はブルターニュまで追い詰められ、ついに捕まりました。ドイツ兵は一人ずつ名前を聞き、身分証を調べました。でも、私はアンドレ・ビリエ。れっきとしたフランス人でした。そのおかげでドイツ軍に捕まらずに助かったのです。」

ルネは大きく息を吐いた。

「その後、私は自転車一つで、ニースまで逃げてきました。途中、ドイツ兵に呼び止められました。その時ものなんとか切り抜けました。あれから二年半。静かに暮らせるはずでした。だから、神父様、助言を求めに来たのです。」

神父は胸を打たれ、しばらく言葉が出なかった。そして神父は静かに口を開くと

「何という人生だろう、ルネ。よくここまで生き抜いた。あなたには語学の才能がある。それを使いなさい。大学でドイツ語を教えるのです。ドイツ語の教師がドイツ語を話すのであれば怪しまれない。私が推薦しておきましょう。」

ルネは震えながら神父に感謝を伝えた。数日後、彼のもとに一通の手紙が届いた。震える手で封を切ると、そこには「採用」の文字。数えきれないほどの苦難を越え、ルネが初めてつかんだ幸せだった。

二年が経った頃、思いがけない知らせが入る。アメリカとイギリスの連合軍が海を渡り、ノルマンディに上陸したのだ。

「連合軍が助けに来てくれる！彼らが来るまで待とう」

希望を込めて呼びかけたルネに、町の人々は冷たい視線を返した。彼らは農具や古い猟銃りょうじゅうを手に取り、自分たちの力でドイツを打ちのめそうと熱くなっていた。その光景を見て、ルネは彼らと心を通わせることはできないと悟った。大きな孤独感と失望が彼を襲い、家に閉じこもるようになってしまった。

そして一か月後。ルネがいつものようにカーテンを開けると、外に旗が立っていた。

「まさか！ドイツ軍が来たのか？」

恐怖で体が凍った。しかしよく見ると、それはフランスの旗だった。さらにイギリスやアメリカの旗も並んでいる。

すべてを悟ったルネは、喜びのあまり涙を流した。やがて五月八日。ラジオが告げる。

「ドイツ降伏。連合軍の勝利！」

その瞬間、町中の人々が通りへあふれ出し、大声で歓声を上げた。パリではシャンゼリで通りやコンコルド広場に人々が集まり、歌い踊り、抱擁ほうようで喜び分かち合ったという。

戦争が終わった後も、ルネはデパートの仕事を続けていた。しかし、やがて独立し、リボンとヘアゴムの会社を立ち上げ、パリ郊外に家も建てた。

ある時、長年行方のわからなかった姉の消息が届いた。彼女は夫とともにアメリカに逃れていたが、戦後フランスに戻ってきていたのだ。ルネはすぐに手紙を送り、姉の住む場所を突き止めた。感動の再会を果たしたその時、彼は姉を強く抱きしめ、これまで的人生の苦難を語ったという。ルネの会社は大成を収めた。大学には進学できなかつたが、百貨店で積み重ねた経験が生きたのだ。

ただ、一つだけ気にかかることがあった。それは生まれ故郷のドイツの町のことだった。あるとき、彼はかつての親戚の家を訪ねたが、そこにいたのは見知らぬ人々ばかりで、看板の名前もすべて変わっていた。そこはもう彼の知る懐かしい故郷ではなくなっていた。

戦争で全てを変えてしまったのだ。

そして何年か後、彼は一人のユダヤ人女性と出会い、二人の子供を授かった。戦争が始まってから十五年が過ぎ、ルネは四十五歳になっていた。

さらに三十年が過ぎ、娘は結婚し、七歳になる子供を連れて実家を訪ねた。ルネは孫を膝に乗せ、静かに自分の経験を語った。年老いてはいたが、その言葉には熱い思いが宿っていた。95歳になるまで、家族に囲まれて幸せに暮らしたルネは、笑顔のまま眠るように息を引き取った。暖かい春の午後だった。

この物語の主人公ルネは、僕の曾祖父だ。彼が「生きる」道をえらんだから、僕は今ここで生きている。ルネは、分かれ道にさしかかるたび

に、知恵と勇気でそれを乗り越えてきた。そして最後には、自分の幸せを自分の手でつかんだ。「分かれ道」に立ったとき、どう行動するか。それは自分ひとりの問題ではなく未来の命も左右するのだ。この物語を書きながら僕はそのことを強く感じた。

